

竹取物語 1

かぐや姫の生い立ちと成長



かぐや姫の入ったかごは竹を編んで作ったもの。

昔、竹取の翁と呼ばれる人がいました。

野や山に入っても竹を取っては、いろいろなことに使っていました。翁の名は、さぬきの造みやつこといいました。

ある日、竹の中に、根もとが光る竹が一本ありました。不思議に思って近寄ってみると、筒の中が光っていました。中に、三寸さんすうくらいの人がかわいらしい姿で座すわっていました。

翁はこの子を家に連れて帰り、媼おうなと一緒に大切に育てました。

考

教科書の絵と、右の絵とでは、かぐや姫と翁、媼おうなの描かれ方にどのような違いがありますか。

問

翁の名前は何かありましたか。

問

「三寸」とは現在のどれくらいの大きさでしょう。



音読してみよう

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。

竹取物語 2 なよ竹のかぐや姫と名づける



かぐや姫はかごから出て、成人女性の衣装^{いしやう}を身につけている。

その後、翁は、しばしば竹の中に黄金を見つけるようになり、しだいに裕福^{ゆうふく}になりました。女の子は、育てるうちに、ぐんぐんと成長しました。三か月くらい過ぎた頃^{ころ}には、一人前の大きな人になったので、髪上げと裳着^{もぎ}という成人のお祝いをしました。翁は、御室戸斎部の秋田^{あきた}を呼んで名前をつけさせました。秋田は、「なよ竹のかぐや姫」と名づけました。このとき、三日間、お祝いの宴会^{えんかい}をしました。

問 かぐや姫を見つけてから、翁には、どのようなことが起きましたか。

問 かぐや姫が大人の大きになるにはどれくらいの時間がかかったでしょう。

問 「裳着^{もぎ}」とはどのような儀式^{ぎし}でしょう。

音読してみよう

翁、竹を取ることに、久しくなりぬ。勢^{せい}ひ、猛^{もう}の者^{もの}になりけり。

竹取物語 3

若者たちが押し寄せ寄せる



若者たちが、壁に手を当てて、中をのぞきこんでいる。

やがてかぐや姫は、輝くばかりに美しく成長しました。
評判を聞いて、若者たちが、かぐや姫に結婚を申し込もうと、家の周りに集まってきました。かぐや姫の姿をひと目でも見ようと、中には垣根に穴を開けて、のぞきこもうとする者もいました。

考

絵の中の若者たちは、翁にどのようなことを話しかけているか、想像してみましょう。

考

絵の中の翁は、若者たちにどのように答えているか、想像してみましょう。

問

「かぐや姫を得てしかな、見てしかな」とはどのような意味でしょう。



音読してみよう

このかぐや姫を得てしかな、見てしかなと、音に聞きめでて惑い。

竹取物語 4 五人の求婚者に難題を提示



笛を吹く人と、扇で拍子おうぎ ひょうしを取る人がいる。

日暮れになると、求婚者たちが集まってきて、笛を吹いたり、歌を歌ったりするようになりました。翁は、特に熱心に求婚した五人の貴族の中から結婚相手を決めるよう、かぐや姫に促うながしました。かぐや姫は、自分が求める品を用意できた人を結婚相手にしようと言って、それぞれに難題を出しました。それは、この世に存在するかどうかともわからない品々でした。

考

求婚者たちが笛を吹いたり歌を歌ったりしてみせたのはどうしてか、想像してみましょう。

考

かぐや姫は、どのようなつもりで求婚者たちに難題を出したのか、想像してみましょう。



音読してみよう

いづれおとも劣り優りまさおはしまさねば、御心ごこころぎしのほどは見ゆべし。

竹取物語 5

石作の皇子と仏の御石の鉢



石作の皇子は、仏の御石の鉢を錦の袋に包み、造花に結びつけて翁に届けた。

石作の皇子がかぐや姫から求められた品は「仏の御石の鉢」です。これは、昔、天竺（インド）でお釈迦様が使ったといわれる、光る石の鉢です。皇子は、天竺に取りに行ったと偽って、山寺にあった鉢を、錦の袋に入れて、造花の枝に結びつけてかぐや姫の家を持ってきました。かぐや姫は、その鉢には伝説どおりの光がないことを不審に思い、偽物だと見破りました。

問

本物の「仏の御石の鉢」とは、どのような品ですか。

問

かぐや姫は、どこに目をつけて目の前の鉢が偽物であると見破りましたか。

問

「天竺」とは、今日の、どの国をさすでしょう。



音読してみよう

石作の皇子は、心のしたくある人にて、

竹取物語 6

くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝 ほうらい



翁に蓬萊の玉の枝を差し出すくらもちの皇子。

くらもちの皇子がかぐや姫から求められた品は蓬萊山にあるという「蓬萊の玉の枝」です。くらもちの皇子は、蓬萊山に行ったと見せかけ、三年を費やして、職人に宝玉の枝を作らせました。できあがった偽の玉の枝を姫に届け、どんなに困難な旅であったか偽の冒険譚を語ります。しかし、そこへ職人たちが来て、未払いの賃金を要求したことから、うそが露見しました。

問

「蓬萊の玉の枝」の「玉」とは何を意味するでしょう。

考

くらもちの皇子は、どのような性格の人物でしょう。

問

くらもちの皇子は、何年間、かぐや姫の前に姿を現しませんでしたか。



音読してみよう

くらもちの皇子は、心たばかりある人にて、

竹取物語 7

阿倍御主人と火鼠の皮衣
あべのみうし ひねずみかわぎぬ



翁と話す阿倍御主人。火鼠の皮衣を見るかぐや姫。

阿倍御主人がかぐや姫から求められた品は火に入れても燃えないという「火鼠の皮衣」です。阿倍御主人は唐土^{もろこし}からやってきた商人から黄金とひきかえに皮衣を入手します。喜んでかぐや姫のもとに現れた阿倍御主人でしたが、かぐや姫の指示で皮衣を火に入れるとあつという間に燃えてしまいました。

問

「火鼠の皮衣」の特徴はどのようなものでしたか。

問

「唐土」とは、今日の、どの国をさすでしょう。



音読してみよう

火の中にうちくべて焼かせたまふに、めらめらと焼けぬ。
(モウ)

竹取物語 8

おおもものみゆき たつ
大伴 御行と竜の首の玉



自ら船出する大伴御行の上空に雷が近づく。

大伴御行がかぐや姫から求められた品は竜の首に五色に輝くという「竜の首の玉」です。御行は家来に玉の入手を命じますが、彼らは出かけるふりをして逃げてしまいました。今度は御行自身が筑紫へと船をこぎだしますが、大変な嵐にあつて難破してしまいます。御行は播磨の国に流れ着きましたが、その目は李のようにはれ上がり、自分で立つこともできなくなっていました。

問

「逆鱗に触れる」という言葉を知っていますか。どのような意味でしょう。

考

家来たちは、大伴御行をどのような人物と想像していたか、想像してみましょう。

問

「筑紫」「播磨」とは、それぞれ今日の、どの地方をさすでしょう。



音読してみよう

浪は船にうちかけつつ巻き入れ、雷は落ちかかるやうにひらめきかかるに、

竹取物語 9

中納言石上磨足と燕の子安貝



転げ落ちる石上磨足を支え、助け起こそうとする人々。

石上磨足がかぐや姫から求められた品は「燕の子安貝」です。磨足は籠に乗り、高所の巢の中を探ります。すると平たいものが手に触れたので、子安貝を手に入れたと思った瞬間、綱が切れ、磨足は鼎の上に落ちてしまいます。腰が動かなくなった磨足は、かぐや姫と結婚できると大喜び。しかし、その手に握ったものが燕の糞であったことがわかり、磨足は死んでしまいました。それを聞いてかぐや姫は、あわれなことと思ったのでした。

問

「鼎」とはどのような道具か、知っていますか。

問

かぐや姫の、石上磨足への反応には他の求婚者と比べたとき、どのような違いがありましたか。

問

絵では、石上磨足は、籠ではなく、どこから落ちたように描かれていますか。



音読してみよう

燕のまりおける古糞を握り給へるなりけり。

竹取物語10

帝の訪問 みかど



立ち上がって帝から逃れようとするかぐや姫。のが

かぐや姫の噂はついに帝の耳にも届きますが、かぐや姫は会おうとしません。狩りを口実にやってきた帝がかぐや姫の袖を捕らえても、顔を見せようとしません。帝がかぐや姫を強引に連れて行くこうとすると、かぐや姫は影のような姿になってしまいました。帝は、その後、かぐや姫にたびたび歌や手紙を送り、かぐや姫もまたそれに応じて、二人には心の交流が生まれました。

問

この時代の狩りとはどのようなものだったでしょう。

考

影のようになったかぐや姫はどのような姿になったのか、想像してみましよう。

考

帝はかぐや姫をどのような乗り物に乗せて連れて帰ろうとしたでしょう。絵を見て考えましよう。



音読してみよう

御輿を寄せたまふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。
おはんこし (モウ)

竹取物語11

かぐや姫、月を見て嘆く^{なげ}



空には月がかかり、かぐや姫も翁も涙をこぼす。^{なみだ}

その頃からかぐや姫は月を見てはもの思いにふけるようになりました。心配した翁が何を聞いても答えなかったかぐや姫でしたが、ついに八月十五日が近づいた一夜、翁に対して自らが月の都の人であることを告白します。十五日に月から迎^{むか}えが来ることを姫から聞かされた翁はすっかり老^ふけこんでしまいました。

問

八月十五日の月を何と呼ぶか知っていますか。

考

翁に対して、かぐや姫が何も答えなかったのはどうしてか、考えてみましょう。

考

かぐや姫から秘密の告白を聞いた翁の気持ちはどのようなものだったか、想像してみましょう。



音読してみよう

かぐや姫、月のおもしろういてたるを見て、つねよりも物思^{もの}ひたるさまなり。

竹取物語12

警護する兵士



帝から派遣された警護の者たち。

帝は、かぐや姫を守るために、二千人の人を翁の家に派遣^{はけん}します。その日の子^ねの刻頃、空から雲に乗った人々が降りてきて、翁の家の周りには昼間のように明るくなりました。警護の者たちは手に力が入らなくなって、戦う気力も失われてしまいました。

問

「子の刻」とは、現在の何時頃をさすでしょう。

考

警護の人々はどのような武器を持っていますか、絵を見て考えましょう。

問

帝が遣^つわした警護の者たちは、何人ぐらいでしたか。



音読してみよう

かの都の人は、いとけう^(キヨウ)らに、老い^(ナ)をせずなむ。

竹取物語13

かぐや姫、月に帰る



かぐや姫を迎えるために天人が降りる。

天人の一人が、かぐや姫は天上で罪を犯したから、地上で過ごすことになったと説明し、かぐや姫を返すように促します。天人が天の羽衣を着せようとすると、かぐや姫は、少し待ってほしいと言って帝に手紙を書きます。書き終えたかぐや姫に天人が衣を着せると、翁や姫を気の毒だ、いたわしいと思う気持ちは全て失われてしまいました。

問

天上世界の人であるかぐや姫がこの世に生まれたのはどうしてでしたか。

問

「天の羽衣」とは、どのような衣でしたか。

考

天の羽衣を着せられる瞬間のかぐや姫の心情はどのようなものだったか、想像してみましょう。



音読してみよう

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいだける

竹取物語14 不死の薬



臣下が帝に、かぐや姫の手紙と不死の薬を献上^{けんじょう}する。

かぐや姫の手紙を読んだ帝は、この世で最も天に近い山はどこかと尋ねます。臣下^{するが}が駿河^{するが}の国にある山ですと答えると、姫が残っていた不死の薬と、帝に宛てた手紙を、山の頂で焼くように指示しました。多くの士（つわもの）たちが山に登ったため、その山は富士山^{ふじさん}と呼ばれるようになりました。不死の薬を焼いた煙^{けむり}は今も天に立ち上っているということです。

問

「駿河の国」とは今日の、どの地方ですか。

考

帝はなぜ、山の頂上で手紙と不死の薬を焼かせたのか、考えてみましょう。

問

『竹取物語』では、富士山の名前の由来をどのように説明していますか。



音読してみよう

その煙^{けむり}、いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞ、いひ伝^{つた}へたる。